



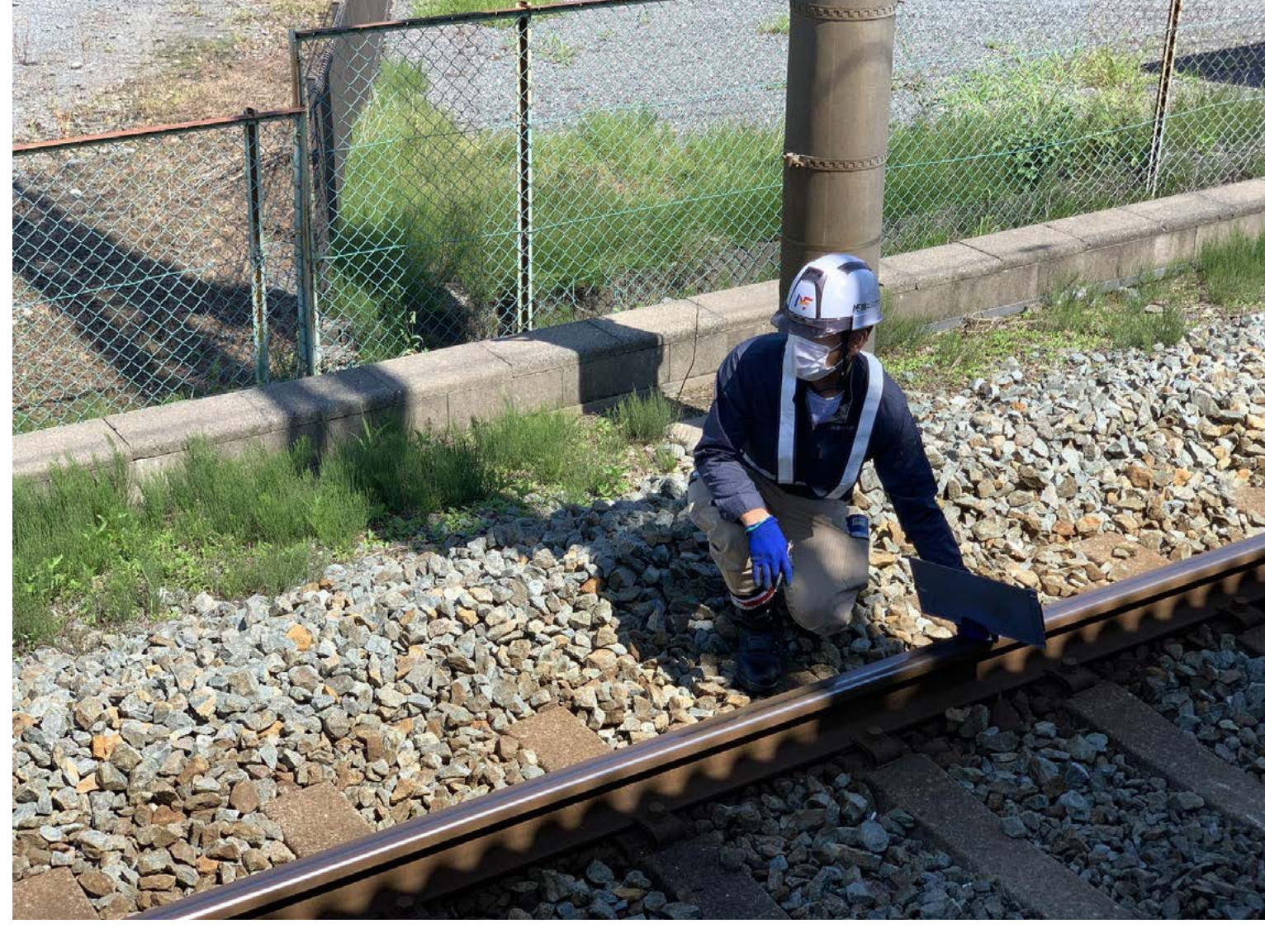
Hideo Ide  
天神大牟田線でのタンピング作業

基本情報:

- 会社: 西日本鉄道
- 設立: 1912年
- 主線: 天神大牟田線
- 路線総延長: 75km
- 最高速度: 110km/h
- 取材時の作業距離: 600m
- 機械名: Plasser & Theurer 08-1XS
- 終電: 犬塚駅: 00:20
- 始発: 犬塚駅: 05:20

日いつる国の太陽が西の空から消えた後、Hideo Ideの仕事が始まる。天神大牟田線の保線作業、それが彼の仕事である。天神大牟田線の天神駅は日本の私鉄駅の中で最も西に位置し、ピーク時には大牟田へ向かう列車がほぼ5分おきに発車するターミナル駅である。

RAILCLUB取材班はHideoの保線作業に同行取材をするため、とある日の午後、犬塚駅にてHideoと待ち合わせた。挨拶後、Hideoははにかみながら、毎晩不安を抱きながら作業に取り組んでいると話した。Hideoとのインタビューはそんな予期せぬ言葉から始まった。



夜間作業準備は昼から始まる。お昼前には作業予定区間に向かい、各支障箇所を確認。該当する箇所のマクラギに印をつけていく。深く身体を落とし、軌道線形を細かく確認。

“私たちにとって事前調査は最も重要な作業の一つです。支障箇所を確認し、自分たちの目で軌道線形を見ていきます。こうすることで今夜の作業区間イメージを身体的に描んでいきます。”

この作業をしていると、周囲の環境変化も感じやすくなります。今日はたくさんトンボが上空を飛んでいるのが見えますね。夏から秋に少しずつ移ってきています。徒歩で行うこの作業は、四季の変化を感じやすいです。”



、確認作業は四季を最も感じる時間です。その時の天候次第で気持ちの良い作業にも、厳しい作業にもなります。

「夜間作業前に不測の事態が起きる可能性を考えます。20年以上マルタイの仕事をしています。どのほど経験を積み上げたても、この不安は払拭できません。そして不安を無くすべきではないと思っています。」

Hideoの言葉に私たちは少し驚き、それは操作ミスによるマクラギ破損を想定しているか質問を投げかけた。

「もちろんそれもあります。それ以上に重要だと考えるのが潜在的な故障を嗅ぎ分け、事前に感じ取ることです。品質の高い機械をしっかりメンテナンスしているので、滅多に故障は起きません。それでも私たちの本線であるこの線はたくさんの列車が通過するので、万が一にも故障するわけにはいかないのです。機械故障により客車運行へ影響が生じるのを避けなくてはならないです。」



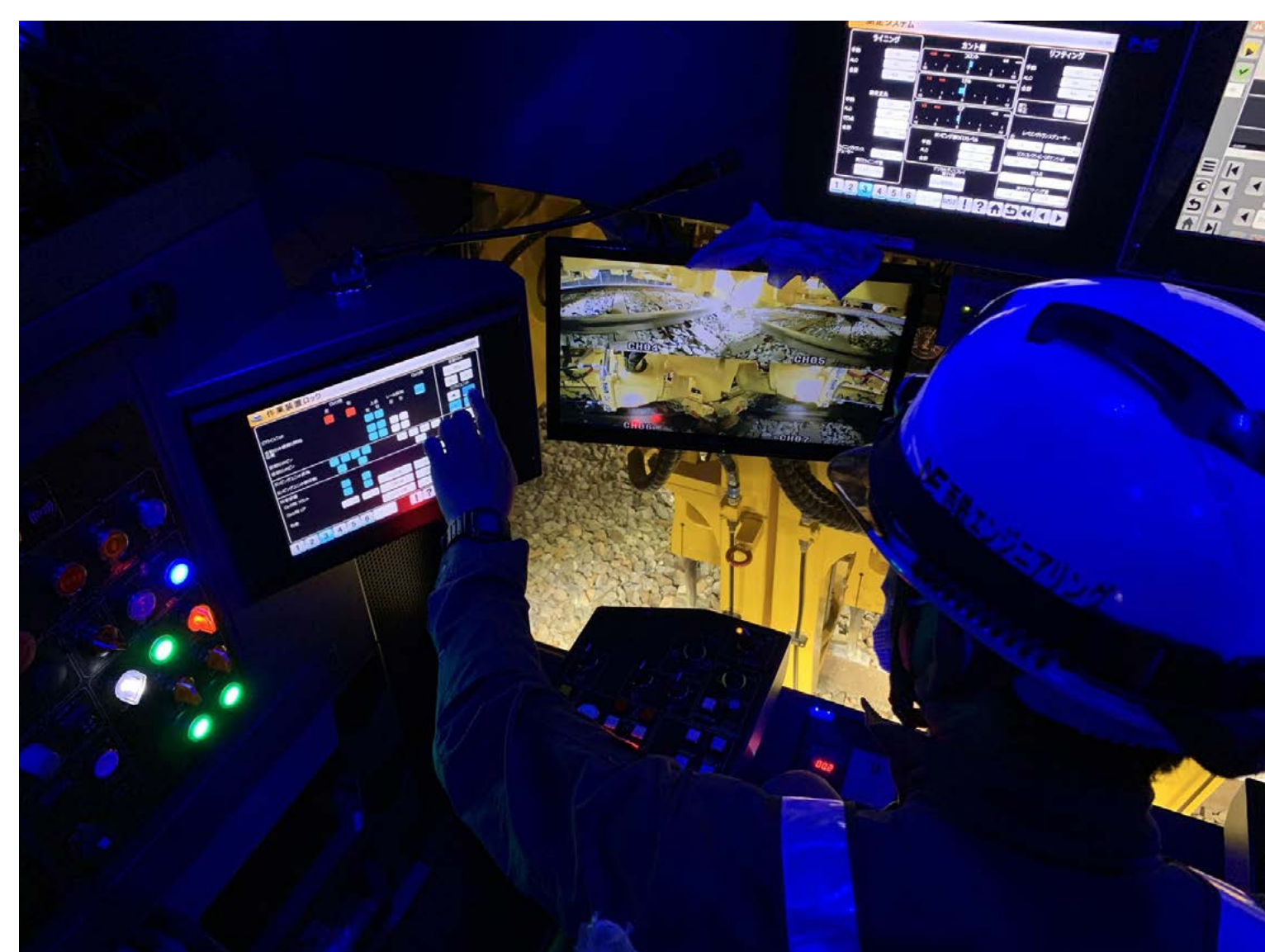
Hideo Ide (中央)、Yukitoshi Tobimatsu (左)、Shota Ikegami (右) 犬塚駅にて

「私たちの年間作業日数は240日を超えています。この機械が弊社で唯一保有している大切なマルタイです。毎日、最高のコンディションを維持できるように努めています。この機械のように安定して稼働してもらえると作業にも集中できます。この機械は僕ら保守チームの一員、頼りできる相棒です。」

保線の仕事を遂行する上で、機械を操作する優秀なオペの存在は重要である。

私たちは器用に機械を操り、静かにそしてスムーズに操作するHideoの姿に感嘆していた。

「マルタイの仕事は私にとって情熱です。天職なんです。」



「機械はそれぞれ小さなクセをもっています。機械ごとの個性といえるかもしれません。」

私たちはプロとして、その個性をはっきりと認識しなくてはなりません。例えば機械の状況が普段と違うこと。なにか異音や作業席に伝わってくる振動がいつもと違うのか？大きな機械ではありますが、小さなことを感じ分け、トラブルの原因を事前に察知しなくてはなりません。

支障箇所の見過ごし、突然のエンジン停止、油圧ホースの破損。至るところに危険が存在します。だから私はあらゆる想定をし、注意深くしていないといけないんです。機械と軌道に対するリスペクトを常に抱いているべきなんです。

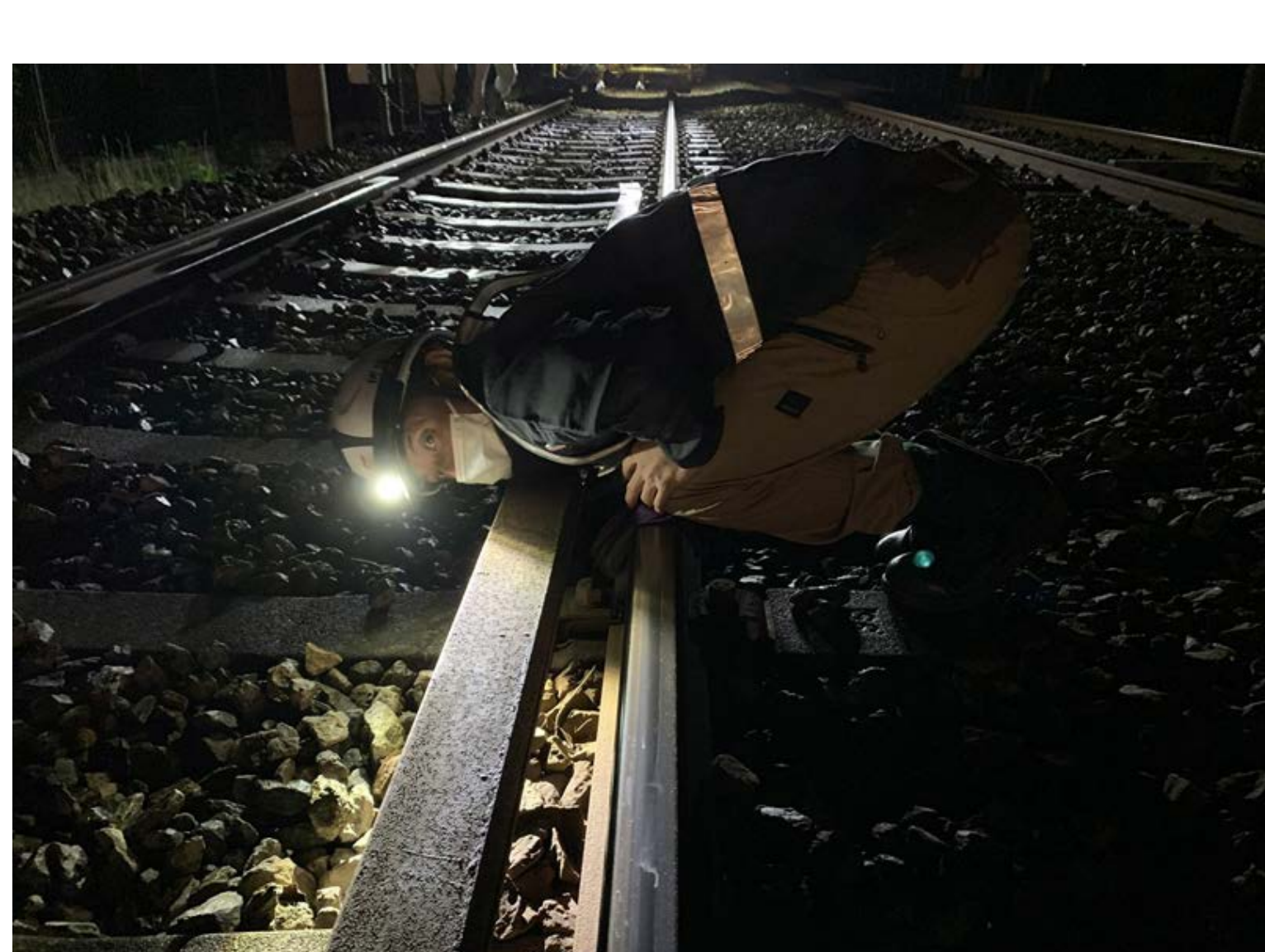
Hideoは20年以上に渡り、マルタイと仕事をしてきた。

彼の最初のマルタイはUnimat Combi 08-275でリフティングフックを装備している機械であった。

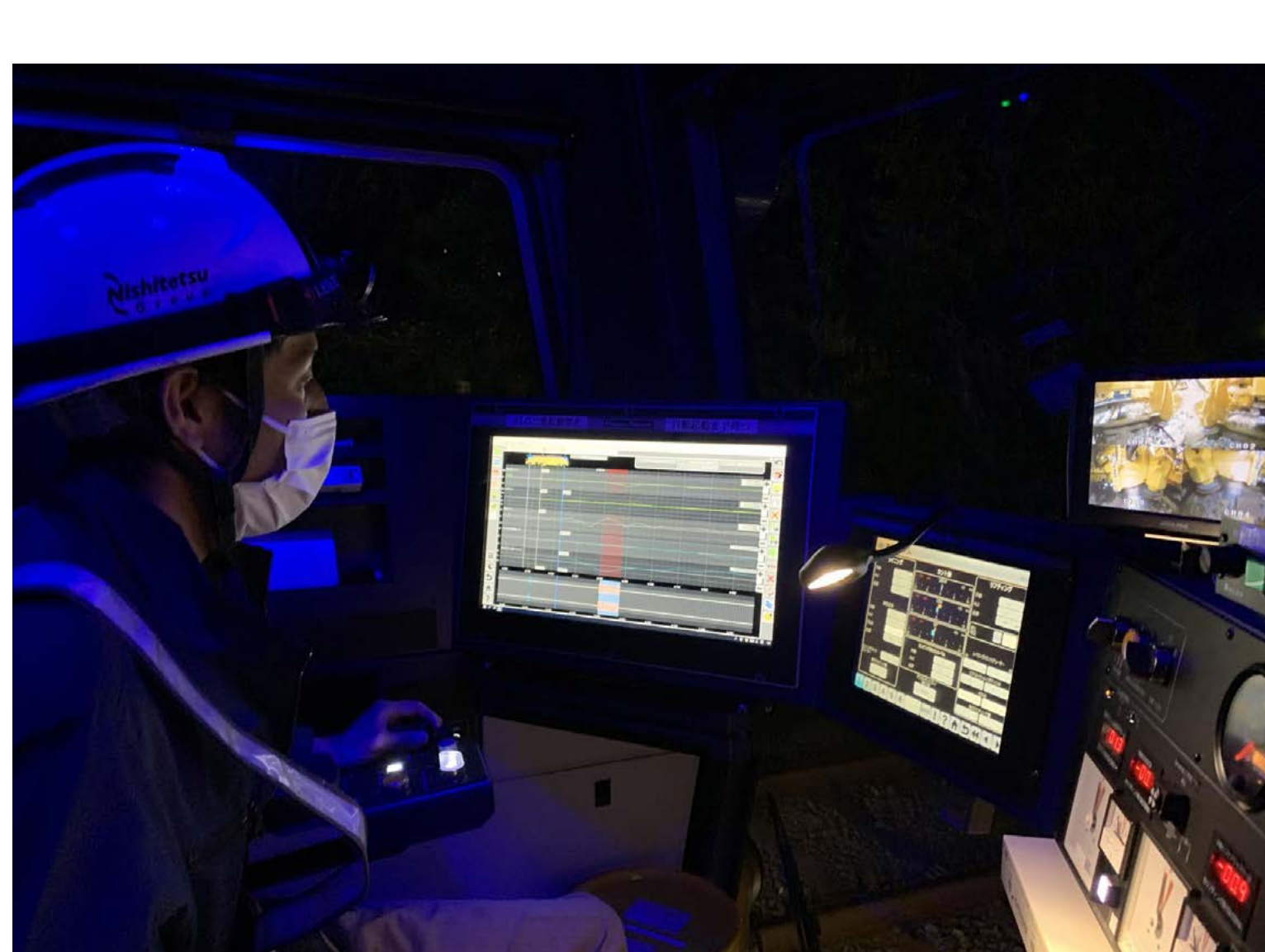
「支障物の位置を考慮し、フックの位置を調整するのが本当に楽しかったです。」

そうHideoは当時を振り返った。そして最新の08-1XSの印象もこう話してくれた。

「この機械にはとても助けてもらっています。毎晩600mの保守作業はこの機械なしには実現できません。もっと作業距離を長くすることも可能ですが、この距離をさっさと仕上げるのが私たちの役目です。」



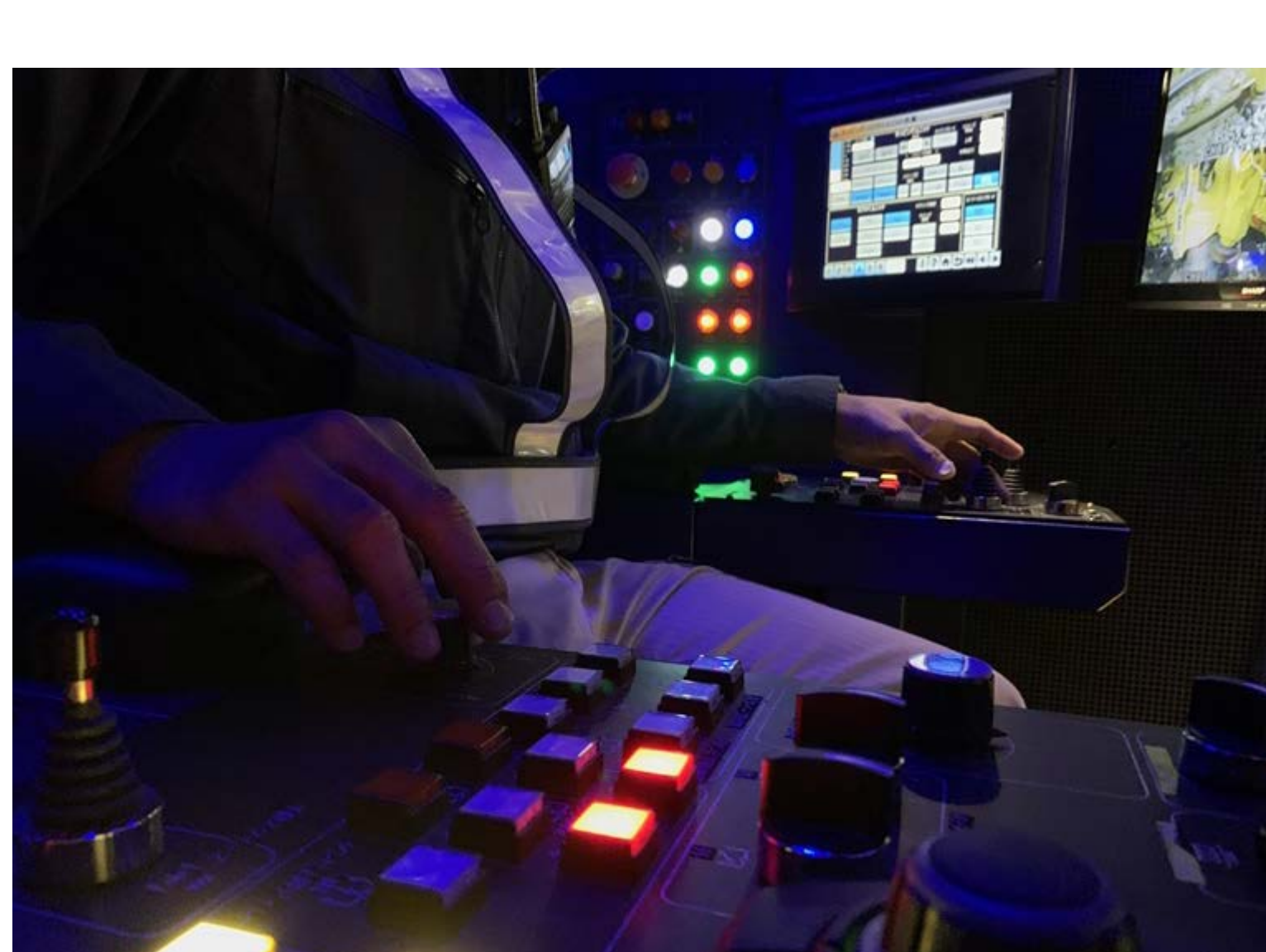
作業チームメンバーShota。夜間作業中、突き込み作業をHideoから引き継ぎ、巧みに機械を操る。



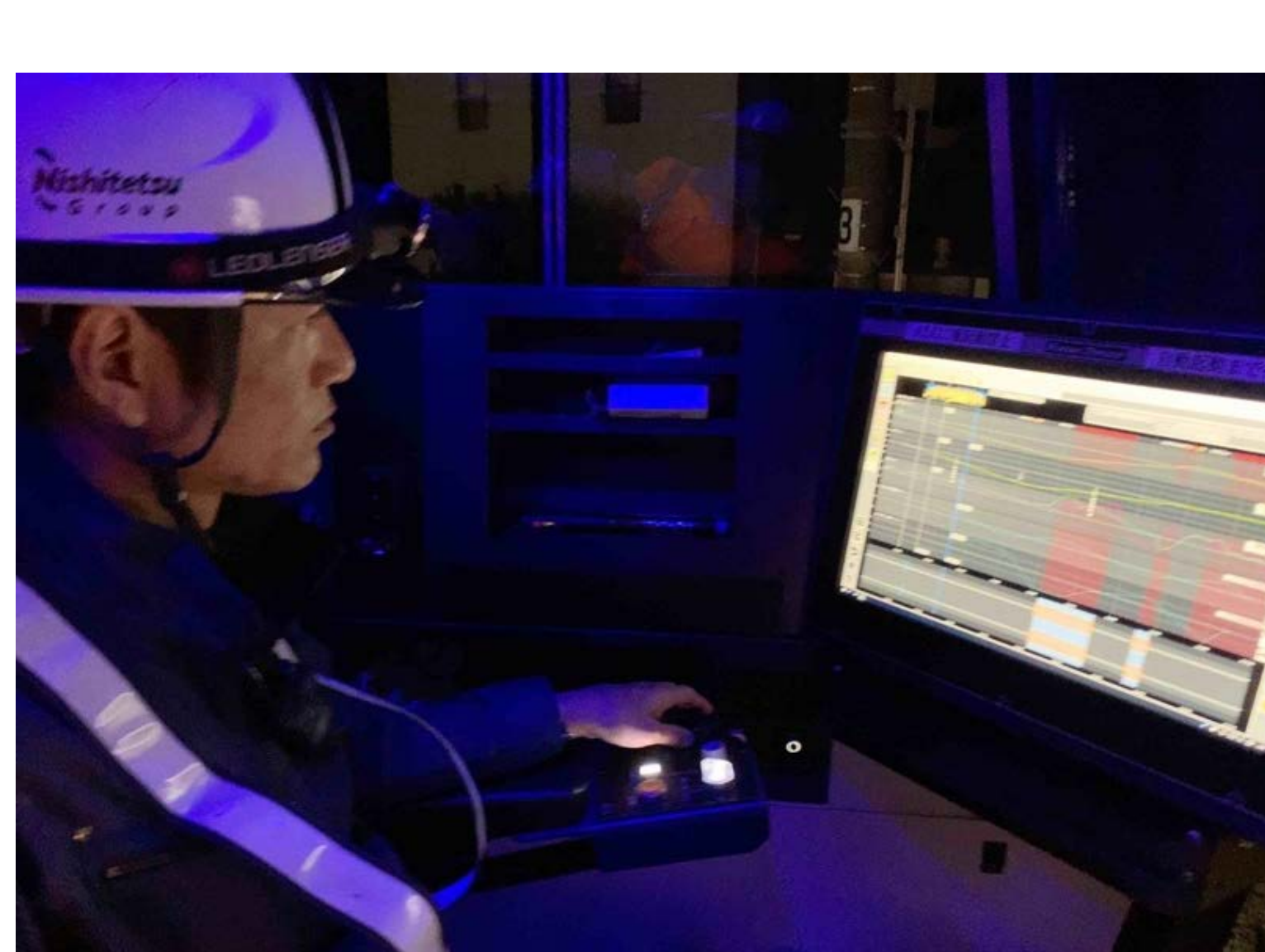
Shota: 「新しく導入された機械はこれまで以上に空間スペースが作業が便利です。フロント・リアキャンピングのモニターも大きくって、作業がしやすくなりました。」

「夜間作業が大変じゃないか、友人たちから聞かれることがあります。機械で作業しているのが楽しいので全く苦になりません。マルタイの仕事は私にとって情熱です。天職なんです。」

Hideoの機械操作からどれだけ経験豊富なオペなのか分かる。それでも彼は謙虚に日本語講師の講習に助けられているから話してくれた。



左から Hideo Ide, Shota Ikegami, Yukitoshi Tobimatsu.  
Hideo: 「作業はいつも3人で行います。問題が発生したら私たちが解決しなくてはなりません。」



Hideo: 「機械はそれぞれ小さなクセをもっています。機械ごとの個性といえるかもしれません。」



Hideo: 「私はあらゆる想定をして注意深くしています。機械と軌道に対するリスペクトを常に抱いているべきなんです。」



作業結果をオベ自ら確認。作業後にHideoと彼のチームは始発に乗り、自ら走行快適性を確認する。やりがいをを感じる瞬間である。